

近頃天候によって、午前中に散歩に出ることが多いが、コロナ禍はそれを一層助長することとなった。その中で気づいたことの一つは、それぞれの家に植わっている植物の中には、ごくありふれたものが大多数であるが、中には目を見張るものがあることであった。それは庭先植物園とよんでもいいものと思われるので、今回はオーストラリア原産のそれら植物に焦点をあわせて話題としたい。

バンクシア

散歩の道順は季節により多少異なるが、できる限り同一の経路とならないようにと努めている。ある時、自宅から約500m離れたところで、見慣れない植物があることに気付いたが、それはバンクシア (*Banksia*) であった(図-1)。バンクシアはオーストラリアを代表とする植物種であり、オーストラリアが探検の対象であった時代の1768～1771年にクック艦長 (Captain Cook) 指揮のエンデボアー号でオーストラリアを訪れ、植物調査を行ったイギリスの王立キュー植物園園長であったバンクス卿 (Sir Joseph Banks) にちなんで命名された植物群である。その植物がユニークなのは、球果に相当する器官に種子がつくのであるが、その種子の発芽がオーストラリアに頻繁に起こる山火事に適応して、山火事を経ると発芽するという特性を持っていることである。しかしながら、その近くの住民もそれとは気づかない風情であったので、その人には「これはオーストラリア原産のバンクシアというのですよ」と説明した。そして、あるインタバルで



図-1 バンクシア

その成長過程を追って変化を楽しんだが、球果に種子が形成されるのも観察できた。そういえば自宅にその球果を用いた土産

物(図-2)があるが、それは、国際会議の講演者の推薦を依頼されたとき、候補者として挙げたJ.博士が大阪での会議に際して筆者に下さったものである。バンクシアの球果に細工がしてあるが、バンクシアであることには疑いがない。かれこれするうちに、道順を変えた時、自宅から300mくらいのところにまた別種のバンクシアがあるではないか(図-3)。それは灌木状で明らかに別種のバンクシアであり、丈が低く、球果の様子も小ぶりであった。その家には、それ以外にもカンガルーポー (*Anigozanthus*) が植えられており、南アフリカ起源のプロテア (*Protea*) を植えていることは、相当マニアックな趣味と思われるが、その家の方とはお話ししてみたいと思っていた。ある日曜日に、手入れをされている方を見て、やはり相当のご苦労があることを知った。かくして、表題の庭先植物園は結構楽しめるものであるという認識を持ち始めた。その他に、オーストラリア原産ではユーカリは何種類か見られるが(図-4)、その葉の光沢はいかにも燃えやすいという特性を現わしているように思われる。またその木は、若い段階と成長した段階では葉の形態が著しく異なる異型葉性を示していた。ユーカリは、複数種導入されると推定されるが、その動態も大いに気になる。その他には、ランプブラシ (*Callistemon*)、アカシア (*Acacia*) の類も結構見られるが、今回は花期の時期があつていなかったもので、説明は省かせていただく。まだまだ、注意すればもっと会えるのではという予感であるが、ここではこれくらいにして、かつてオーストラリアを訪問した折の印象に移りたい。

オーストラリア訪問記

それは23年前で、東京大学へ移動する直前で、前任地の基礎生物学研究所の最期の年の2月初旬であった。そのころ、



図-2 バンクシア球果の土産物
上部に加工してあるが、球果であることには疑いがない。



図-3 灌木性バンクシア

オーストラリア科学技術研究機構 (CSIRO) の園芸研究所と二国間研究協力関係にあり、先方の訪問は既に受け入れていたので、次は筆者が訪問する予定に入っていたが、そのためには手続きを日本学術振興会にする必要があった。しかし、職場が変わると状況も変わるので、個人研究費の余裕もあったので、それを使って共同研究を実行するために訪豪することとした。行きはカンタス、帰りはANAと筆者の旅行としてはずいぶんゆったりしたものとなった。そして、その12日間の旅行はほぼ先方からの提案に従ったが、オーストラリアに独特の植生を経験することができた。それらを思い出して冒頭にあげた植物の現地での記憶をたどることとする。旅程は、シドニー (Sydney)、キャンベラ (Canberra)、メルボルン (Melbourne)、ミルデュラ (Mildura)、アデレード (Adelaide) といずれもオーストラリア南東部にあり、ミルデュラを除いては大都市であり、2月初めであったので、当地の季節はなお夏の盛りであった。キャンベラではCSIROのバイオインダストリー部門を訪問したが、着くと入り口のドアの上に張り紙があり、筆者はそこではセミナーをすることになっているのではないかと、予め聞いていなかったが、何とか済ませて、近くに国立植物園があることを知って訪問することとした。そこは、広大なオーストラリア各地の代表的な気候を反映させたような施設が設けられており、バンクシア他の植物の植生の体験することができた。訪問するなり、北半球とは植生が相当に異なっていることに気付いたので、そこにあった売店でオーストラリアの植物種の図鑑を2冊求めた。その中には初めにふれた植物があり、概要を知ることができたが、ユーカリは多様に分化し、500種以上が数えられるということであった。また、広大なオーストラリアの気候を限定的であっても再現するような施設の運営は大変であろうとも想像したが、そのような規模の施設にはその後他の地では経験していない。

次には、メルボルンから、セスナ型の飛行機に乗ってミルデュラへ向かったが、同乗者はわずか10人程度であった。そこは内陸の砂漠に近い気候であり、雄大な大陸を実感でき



図-4 ユーカリ
基部は丸葉であるが、成長につれて先端は細長い葉に代わっていく。

たが、それでも地図で見ると大陸の周辺部であった。そこにはCSIRO園芸部門の試験場があり、オーストラリア原産の果実植物の試験栽培を行っていた。実用化にはなお障害があったのであろうと想像しているが、それらをマーケットでは未だに見ていないからである。見慣れない植物種を知ることには楽しいことであった。

その後は、迎えに来ておられた園芸部門のB.博士の運転でアデレードに向かったが、オーストラリアらしい経験をするようになった。道はどこまでもまっすぐな一本道で、3時間経つのに途中カンガルー注意の看板があるだけで、カンガルーには一匹も出会わなかった。アデレードに近づくにつれて、バラ園が現れ、次にはブドウ畑があり、ワイナリーがあった。説明によると、そこはオーストラリアでも有数のワイン産地であるということで、施設も見学させてもらった。CSIRO園芸部門の重要な課題はワイン生産の向上であることを知って納得であった。アデレードは州首都であるが、中都市という風情であり、研究所はホテルとは街の反対側であった。地図を見ると柵の目状になっているので、間違えようもなからうということ、ある日の午後歩くと3時間でホテルに到着した。これで街を縦断したことになるが、時間がある限り歩いて街を縦断することはその場所の地理を知るには最もよい方法であることはあちこちで経験しているが、ここでもそれは果たせた。そして、ホテルから遠くないところにアデレード植物園があるので、訪問すると、オーストラリア固有のナンヨウスギ (*Araucaria*) に出会ったことはうれしい出会いであった。

かくして、オーストラリアの印象を目の前にある植物と対比させるとかつての印象がまざまざとよみがえってきた。日常的な散歩も注意さえすれば結構楽しめるものであり、中には思いがけないものが多々あることに気付いたので、散歩も楽しみとは言えないだろうか。